

## 電子教科書に対応した「中国書道史年表」の教材化

中根 海童\*<sup>1</sup>

<概要> 「時代」「人物名」「古典名」「図版」の羅列だけではなく、遺跡より出土した筆の推測される性能および書写面の有り様と用筆法<側筆・直筆>まで関連させた「中国書道史年表」作成を試みる。そして「書体の変遷図」も加えて電子化し、図版の拡大機能を備えて、より視覚的な理解ができるように教材化を図る。

<キーワード> 出土筆の比較検討、筆の性能と用筆法（側筆・直筆）、書写面と用筆法、書体の変遷、電子年表

### 1. はじめに

「中国書道史年表」といえば、書道教室の後ろの壁面上部に横長に掲示されているのが常である。見ようにも文字・図版ともに小さく、書道史の概略を知るしか術はない。

また、古典名とその図版が並記されていれば良いが、ずれている場合をまま見かける。

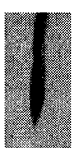
そこでこの度の「電子教科書化」への取り組みを機に、それらの欠点も補った「中国書道史年表」作成を目指すこととした。

### 2. 中国書道史年表の作成

単なる「時代」「人物名」「古典名」「図版」の羅列だけではなく、遺跡より出土した筆の推測される性能および書写面の有り様と用筆法<側筆・直筆>まで関連させた「中国書道史年表」作成を試みる。

#### (1) 出土筆から推測される用筆法

秦時代に蒙恬が筆の改良をしたとされているが、どのような改良であったのだろうか。ちょうどその前後の筆と竹簡が遺跡より出土しているので、比較検討してみたい。

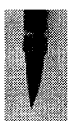


包山出土筆

包山竹簡



—蒙恬による筆の改良—



尹湾出土筆

尹湾竹簡



上の図版を見てもわかるように、蒙恬による筆の改良以前の筆は、ただ単に穂先ができるように毛を束ねただけのもののである。したがって弾力少なく、用筆は直筆にならざるを得なかったと考えられる。それで「払う」ような書きぶりとなり、筆写される線は、太細の変化が少なく、収筆は細く抜けている。

それに対し改良後の筆は、円錐形を呈し腰の部分がかかにも強く、弾力がありそうである。したがって用筆は側筆可能で「押す」書きぶりができ、例示した尹湾竹簡の三字目の「史」の左払いが押し上げられて収筆は太い。そして筆写される線は、太細の変化が多くなっている。

#### (2) 書写面の有り様と用筆法

##### ① 甲骨文

動物の骨（主に牛の肩胛骨）や亀の甲羅（腹側）に刻された文字ではあるが、下書き（右図参照）をしたと思われる。



その書写面が平滑か粗面かはともかくとして、前項で取り上げた「包山出土筆」に近いものと想像され、用筆法は直筆にならざるを得なかったと思われる。

##### ② 金文

鑄型に如何なる方法で文字が鑄込まれたかの解明はなされていないが、鹿皮にまず文字を刻し、それを粘土の型の上に押し当てたとする説（東京大学名誉教授松丸道雄氏）によれば、鹿皮に刻す前に下書きをしたと思われる。その面が平滑か粗面かはともかく、甲骨文の場合と同じく、筆の制約上直筆であったと思われる。

##### ③ 古隸

「開通褒斜道刻石(66年)」「石門頌(148年)」の時代は、蒙恬による筆の改良が成された後なので、十分側筆可能ではあるが、これらの古典

\*1 NAKANE, Kaïdo : 岐阜女子大学 e-mail= kaido@gijodai.ac.jp

【電子化された中国書道史年表】

は直筆で書かれたと思われる。それは、これらは摩崖碑であり書写面が粗面であったからである。粗面の場合、側筆で書くと線が浮いてしまう。線の太さが一様なことも直筆であったことを物語る。



開通褒斜道刻石



石門頌

④ 八分

「乙瑛碑(153年)」「礼器碑(156年)」は、平滑な碑面に書かれた。筆の改良後でもあり、側筆が可能である。一本の横画の中にも太細の変化をつけ、また上の輪郭線がほぼ直線に、下の輪郭線が弓形になる形状は、側筆でなければ無理である。



乙瑛碑



礼器碑

⑤ 楷書

500年前後に、対照的な二種類の楷書がある。「始平公造像記(498年)」と「鄭羲下碑(511年)」である。



始平公造像記



鄭羲下碑

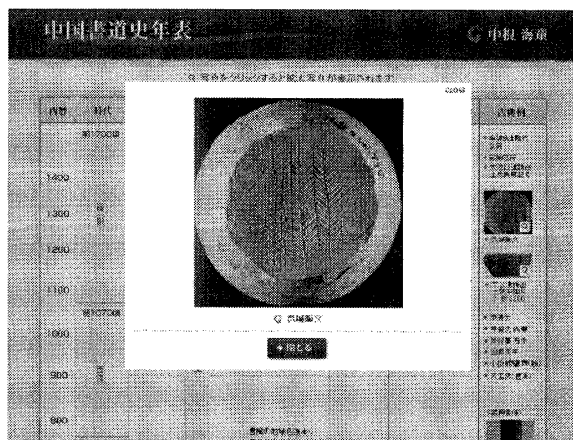
図版を見てわかるように、「始平公造像記」は側筆の特徴を有し、「鄭羲下碑」は直筆のそれである。なぜ同時代の楷書に用筆法の違いが生まれたのであろうか。

それは書写面の違いであったと考えられる。前者は洞窟内の平滑な面であるのに対し、後者は摩崖碑の粗面であるからである。

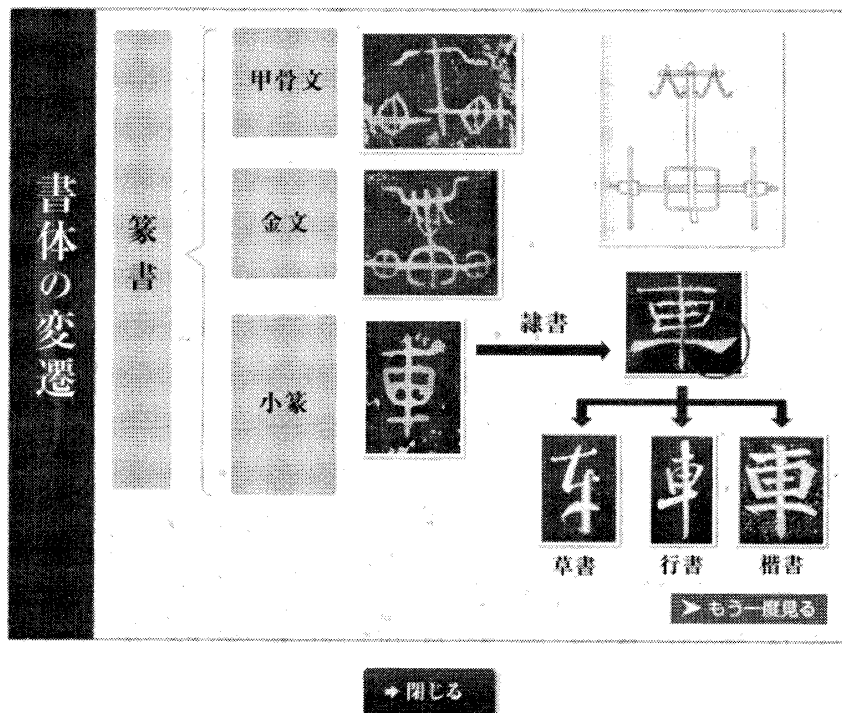
(3) 年表上の指定図版の拡大機能

上述(1)(2)の観点を取り入れて、電子化した中国書道史年表を作成したが、より詳しく図版を見るために拡大機能を備えた。「虫メガネ」マークの付いた図版の上で左クリックをすれば、自動的に拡大図版が現れる。今回17の図版にその機能を設けた。一例を下に示す。

【指定図版の拡大】



【書体の変遷図】



3. 書体の変遷図の作成

書体の変遷を視覚的によりわかりやすくするため、アニメーション化を試みた。中国書道史年表の見出しの中の「書体の変遷」を左クリックすれば、自動的にアニメーション画面となる。そしてクリックするごとに次の図が現れる。

下図は「車」を例にしているが、アニメーション終了後の画面である。当時の車を正面から見た姿の象形が、甲骨文・金文の字形であるが、不思議なことに車輪部分だけは側面図となっている。それはともかく小篆の字形とは大いに異なる。およそ書体の変遷は、簡略化への道でもあるが、その簡略化が「車」の場合特異なのである。つまり、甲骨文・金文の字形の中の片輪のタイヤと車軸の部分が切り取られて、左に90度回転した姿が小篆の字形となったわけである。この様子もアニメーション化し、下図の「小篆」をクリックすれば現れるようにした。

4. 電子化された中国書道史年表の必要性

以上のようにして電子化を試みた「中国書道史年表」を、インターネットエクスプローラで閲覧できるようにCD化した。これで、従来書道教室で見上げるように見るしかなかった「中国書道史年表」が、目の前のパソコン画面上で確認できることとなった。しかも、図版付きの年表の持ち歩きができ、個々の勉強に即応的に供するであろう。

また、液晶プロジェクターを使用してスクリーン上に大写しできれば、より大人数に、より具体的に提示でき、書道史の学習がはかどることと思われる。さらに拡大機能を使用すれば、古典をより綿密に比較検討でき、鑑賞指導にも役立つであろう。

## 5. おわりに

このたびは、拡大機能を備えた図版が17であったが、今後その数を増やしより多くの古典等の図版を取り入れていきたい。

また「書道」は実技教科でもある。実技の上達の秘訣は、揮毫場面を見ることである。古典の図版をクリックすれば、拡大機能だけではなく、その古典の臨書揮毫場面が動画として提示できればと思う。そうなれば、より個々の要求に応えることができ、個の伸張を図ることができるであろう。

### <参考文献>

- ・『書道全集』平凡社 昭和31年
- ・『中国法書選』二玄社 昭和63年
- ・阿辻哲次『図説 漢字の歴史』平成元年
- ・『墨』第90号 芸術新聞社 平成3年
- ・「シルクロードのまもり」展図録  
大阪府立近つ飛鳥美術館 平成6年
- ・玉村霽山『中国書道史年表』二玄社  
平成10年
- ・名児耶明『日本書道史年表』二玄社  
平成11年